



## 巻 頭 言

### 虚に吠え実を生じた農薬

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事 梶原 敏宏  
社団法人 日本植物防疫協会 会長

スーパーの食品売場などを覗くと、野菜などの生鮮物の包装に、有機栽培、無(減)農薬、自然食品などの表示がやたらと目につく。また新聞の記事や広告にも、このような文字が氾濫している。

どうも一般の消費者の多くは、農薬をはじめとして科学の力によって合成された物質は有害で人類に危害をもたらすから、このような物質を用いて生産されたものは危険で、天然あるいは自然のものであれば安全で健康的であると思いつけているようである。無知と云えばお叱りを受けるだろうが、私にはどうもそうとしか受け取れないのである。

本川達雄東工大教授の書かれた“ゾウの時間 ネズミの時間—サイズの生物学”(中公新書 1087, 1992)の中に、「植物細胞の液胞の中身は、ただの水ではない。いろいろなものが入っているが、一つは毒である。アルカロイドや配糖体などの毒を含み、これでつつ立っているだけで逃ることもできない植物が動物に食べられるのを防いでいる。……」と記してあった。

確かに野生の植物が種を維持するための手段として、人類や他の動物に対し有害な物質を含んでいることは当然である。若い頃、同僚と酒の肴がなく、手許にあった藤の実を焼いて肴代わりにし中毒をおこしたことがある。無謀と云えばそれまでだが、天然物の恐しさを体験した。

考えて見れば当然のことであって、人類は食物とする植物から有毒な物質を除去して利用し、あるいは品種改良によって有毒物質を含まない品種を育成するなどの努力を重ね、今日のように

に美味しい食品が豊富に供給されるようになったのである。

したがって、食品として改良された植物は、基本的に病虫害などの外敵に対して弱く、生産を確保するためには、それらを防ぐ手段が必要で、農薬もそのための一つの手段であって、農薬なしに作物の安定生産が確保できないことは、このことから明らかである。

不幸にして“沈黙の春”や“複合汚染”などの影響もあって、農薬と云えば危険極まりないものと考えられるようになり、関係者が安全な農薬の開発とその安全使用に心血を注いでいるにもかかわらず、このような傾向はますます強くなっていく感じさえする。

今年6月号の文芸春秋に住専・金融に関し“虚に吠え実を生ぜしむを懼る”という記事があった。エリザベス・M・フェラン著“創られた恐怖「発ガン性」の検証”にも書かれているが、こと農薬については、まさに虚に吠え実を生じてしまった事例といえよう。

このように虚から実に転じたものを引戻し、農薬を正しく理解してもらうには、農薬工業会や松中教授が指摘しているように、教科書から誤った記載を改めることから始めなければならないことは、言うまでもない。幸い最近、“農薬とは何か”、“農薬はこわくない”など、農薬を正しく理解してもらうための著書も出版され、好評を博していることは、関係者を勇気づけるものである。少しでも多くの人達に正しい理解をしてもらうよう、私も及ばずながら努力したいと思っているところである。